

## ウィリアム・ジェームズと姉崎正治

— ジェームズの姉崎宛書簡 —

深澤英隆・村山元理

先に本誌第7号において、ドイツの宗教哲学者パウル・ドイッセンの姉崎正治宛書簡を紹介する機会があったが、やはり宗教学研究室に保管されている姉崎宛書簡の中から、今回はアメリカの著名な哲学者ウィリアム・ジェームズ (William James 1842-1910) の書簡を紹介してみたい。

ジェームズについては、ここでことさらに説明するまでもないだろう。没後より今日まで絶えず再解釈・再評価の対象となり、また最近でもアメリカなどであらためてジェームズ・ブームがおこり、続々と新刊の研究書が現れつつある現状をみるとき<sup>(1)</sup>、ジェームズ哲学の射程と奥行きに感嘆の念を覚えざるをえない。以下に書簡の原文を紹介するにあたって、姉崎とジェームズとの関わり(深澤)、また書簡執筆当時のジェームズの様子など(村山)について、若干のコメントを付しておくことにしたい。

### I 姉崎正治とウィリアム・ジェームズ

本格的な思想の比較ということになると、言うまでもなく考察すべき問題は数多く、およそ筆者の手に余るが、姉崎・ジェームズ両者の具体的な接点について多少確認できる事実を、まずいくつか指摘しておくことにしたい。

姉崎が直にジェームズの名に言及している文献として最も重要なのは、ジェームズの『宗教経験の諸相』(The Varieties of Religious Experience, 1901-02)を紹介・論評した一文「ジェームズ氏の『宗教的経験』に就て」であろう<sup>(2)</sup>。講演を基にしたと思われるこのかなり長い論評は、『諸相』刊行の翌年に早くも活字になっており、ここからも姉崎が同書に大きな重要性を認めていたことが察せられる。この論評で姉崎は、『諸相』全体の内容を手際よく紹介したのち、その注目すべき点

を2つにまとめている。それによると、第1の点はジェームズの立場が「徹頭徹尾経験的の立ち場から観て斯くまで問題を進めた」ことであり、「此等の諸種の経験が果して客観的価値を有するか……種々なる信仰のどれが果して真理であるか」「實在の有無」などについての判断を控えて、経験の事実を解明せんとしている(今日の言葉で言えば宗教経験に対する現象学の立場をとっている)こと、また第2に「ジェームズ氏の結果の結果若くは、其の根底といふべき者は、吾々の宗教的経験は、吾等の通常意識に現はるるよりモット広い範囲を持って居るといふ事」、潜在意識的な領域が「よほど吾等の宗教経験と深い縁故を持って居らしいといふ事」を解明した点にある。結局「私も固より『ジェームズ』氏研究の結果に就て悉く同意といひにくい所もありまするが、経験主義の研究としては極めて経験的に往つて忠実であると云ふことは徹頭徹尾賛成の意を表する」としている。

ここで注意すべきは、上に姉崎が挙げた2点とともに姉崎自身の宗教学と宗教思想に通じる特色でもあるとの事実である。『諸相』刊行前の1900年に世に出た『宗教学概論』(東京専門学校出版部)を見ると、「宗教は基根底に於て心理的事実なり、故に宗教学研究の第1着歩は、心的事実として、宗教意識を研究するにあり」(32頁)とあり、宗教心理学を体系の第1部門として詳述している。もっとも同時に姉崎は、宗教経験・宗教意識の外化(「発表」「社会的顕動」としての「社会的人文」の諸現象にも同等の比重を置こうとしており、この点は「個人的宗教」に主題を限ったジェームズと大きな対照をなしている。(ちなみに『概論』第4部の「宗教病理学」も、宗教意識の病的な昂進を重要資料としたジェームズの観

点に通じるものがある)。一方、姉崎はその宗教意識の分析の中で、意識現象論から一步進めて、宗教意識の「原動力」としての「宗教的欲求」なるものを立てる。「宗教意識の原動力は……自己以上の実力に近親し、或は之を獲得せんとする欲求意欲にあるをみるべし。即此欲求原動力は人間生存の根本として、其意識生活を支配し……知をして外界に此欲求に応じ得るべき対象を設定せしめ……終に衝動的欲求の結果を神人合一の力行意志に発せしめるに至る」(53頁)。まず気がつかれるのは、意欲が宗教的对象を設定し、それを志向するといった、人間の生命・意志現象として宗教を見ていることで、これは客観的実在者との一致にではなく、人間の能動的設定や信念とその帰結とに人間的現象の根底と真理のありかを見るジェームズのプラグマティズムの立場と全く一致すると言っている。これに加えて、この欲求の内実が問題となる。ここで姉崎が考えている欲求ないし原動力なるものが、人間の内面を通路として人間に働きかけるある種の宇宙的・神的意志=意識として考えられていることは、このころの姉崎の思想の背景に、仏教思想と重なりつつショーペンハウアーからハルトマンの無意識哲学に至る同主旨の形而上学的ヴィジョンがあったことから察せられる。この点でも、両者は接近していると言わねばならない。実際姉崎は、1904年に出た『復活の曙光』(有朋館)で、ジェームズと同様、深層心理学や心霊研究の成果を引証しつつ、「宗教の心髄は、一言にして尽くせば、大我即ち一切精神の根抵を吾等の精神に体得することである」との事情を熱情的な筆致で描いている(特に第5章等を参照)。これをジェームズからの影響と考える必要は必ずしもないだろう。まず第1に、これは当時のわが国の(宗教)思想界に広く見られる思想枠組であった<sup>(3)</sup>。また、キリスト教的超越神の観念が力を失うとともに、その代償形成とも言うべき形で、内在(自然、精神、心理、生、体験など)の内に超越の動的顕現を観るような思想が欧米において輩出したが、中でもロマン主義心理学の末裔たる19世紀後半の無意識論哲学や魂=自然神秘主義(スピリチュアリズムを含む)などは、ジェームズやジェームズの時代のアメリカ宗教思

想をも大きく規定した。そして同主旨の思想は日本の思想風土とも合致し、早くから移入されていた<sup>(4)</sup>。したがってここには東西における思想上の共通地平のようなものを認めることができる。また日本の思想界の特殊事情としては、ハルトマンの直系の弟子であり、日本に来る前のミュンヘン時代にデュ・プレルら心靈論者の陣営の近くにいたケーベルの、自称「キリスト教的汎神論」が及ぼした影響ということも考えられる(少なくとも姉崎には色濃く認められる)<sup>(5)</sup>。このように見ると、姉崎にとりジェームズは、規範とすべき思想家というよりも、志を同じくする同胞と目に映ったと考えたほうが、おそらく適切かもしれない<sup>(6)</sup>。

自筆年譜、伝記などの簡単な記述によれば、書簡を受けた当時姉崎は「カーン資金」の給付を受けて世界周遊中であつた(1907年9月から08年10月まで)。しかし残念ながらその後公刊された旅日記や自伝には、短いものだったと思われるこの時期のアメリカ東海岸滞在についての記述は、見られない。これはその後1913年から2年間のハーバード滞在の印象が大きかったことにもよるだろう。ジェームズの書簡では、戦争が問題となっている。ジェームズと同様、姉崎も平和主義者であり、軍国主義の苛烈な批判者であつたことは、著作の端々にうかがわれる。ジェームズは世界大戦を見ることなく没したが、姉崎はそれを経験した。その印象がいかに巨大なものであつたかは、第一次大戦後に書かれた著作(『新時代の宗教』1918、『世界文明の新紀元』1919)において戦争とその社会的・宗教的意味が中心的テーマとなっていることから明かである。

(1) 例えば、次のものなどを参照。

- McDermott, J. J. : *The Writing of William James*, Chicago 1977.
- Down-Scott, F. J. : *William James Selected Unpublished Correspondence 1855-1910*, Columbus 1986.
- Biork, D. W. : *William James, The Center of His Vision*, N.Y. 1988.
- Seigfried, C. H. : *William James' Radical Reconstruction of Philosophy*, N.Y.

1990.

- (2) 「ジェームス氏の『宗教的経験』に就て」(1)・(2)『哲学雑誌』201号(1903)、1-11頁、202号(1903)、7-16頁。なお姉崎のこの論考以前のわが国におけるジェームズ紹介として、今田恵は、5点の論説、1点の著書(福来友吉『ゼームス氏心理学』1900)、2点の翻訳書を挙げているが、そのほとんどは心理学を主題としたものである。(今田 恵『ジェームズ心理学』、弘文堂 1957、151 頁参照)。
- (3) 例えば、比屋根安定(姉崎正治閔補)『現代日本文明史16 宗教史』(東洋経済新報社、1941)においては「明治中葉以降の宗教的覚醒」という章で、大西祝、透谷、清澤、樗牛、黒岩、姉崎、伊藤証信、綱島、ケーベル等が取り扱われているが、ここに触れた思想モチーフはこれらの思想家に多かれ少なかれ共通して見られるものである。ここには言うまでもなく、1904年年初より『諸相』を読み始め(『寸心日記』による)、それに決定的影響を受けた西田幾多郎の名も挙げねばならないだろう(両者の思想的関係については、高木きよ子『ウィリアム・ジェームズの宗教思想』、大明堂、1971、242頁以下参照)。なお、野口武彦『近代日本文学と『批評』の発見』(『批評空間』、1991、No1、6-23頁)は、こうした思想枠組と批評意識の生成や当時の批評的文体の形成との関連を扱っており、姉崎のこの時期の思想と言論活動を考える上でも示唆に富む。
- (4) 自我の生命的・生物学的拡張という理念と、超越的な宇宙的大我の運動のヴィジョンが並列され、重ね見られることは、この種の思想の特徴をなしているが、こうした視点は明治中期のわが国の思想課題にも適合的であったと見ることができる。姉崎も自伝で、キッドら進化論的社會論の宗教学説が自分の内でショーペンハウアーやさらにはシェリングと自然に結びついたり述べている。
- (5) 姉崎の「ケーベル先生の追懐」(『哲学雑誌』、438号、1923、688-692頁)は、ユングの人間類型論をも引き合いに出しつつ人間ケーベルを論じた光彩離陸たるエッセイであるが、ここから

も若年時の姉崎へのケーベルの感化の大きさを想像することができる。

- (6) その他、目に触れた限りで、姉崎がジェームズに言及している箇所を挙げると、「宗教学講座二十五年の想出」(『宗教学紀要』、同文館、1931)で、宗教学講座開設時の「宗教学概論」の講義のうち、宗教心理学を論ずる際の参考に、『諸相』を用いた旨の記載がある(「その刺激が大きかったので」と言われている。5頁参照)。また『社会の動揺と精神的覚醒』(博文館、1920)の序文では、同書の「臨床講義的方法即ち demonstration の方法」が、『諸相』にヒントを得た旨が記されている(2頁参照)。(深澤)

## II シェイクスピアと本書簡の背景

次に、この手紙が書かれた時期のジェームズに関して簡単に述べて見よう。この手紙の書かれた前年の1907年1月に、ジェームズは長年勤めたハーヴァードを退職した。体の方は既に大分弱くなって来ていたが、晩年における最後の形而上学的な活動には、依然と情熱を燃やしていた。退職直後には、1100人を集めて好評を博したコロンビア大での講演、「プラグマティズム」がなされた。これは直ちに公刊される。この年の暮れの11月9日に彼は最後の精力を振り絞ってイギリスからの講演要請(ヒッバート講演)に応じた。それは「哲学における現状について」(“On the Present Situation in Philosophy”)と題されていた。(これは後の1909年に『多元的宇宙論』として公刊されたもので、彼にとっては最後の公の場での講演となった。)この講演は翌年の1908年5月になされたが、この手紙に書かれた2月はちょうど講演の草稿を準備していた時期に相当する。講演は彼の哲学の核心ともいえる、純粹経験・根本的経験論を土台としていて、まさしく彼の最後の哲学的奮闘が続いていた時期にあたる。更に細かく見ていくと、プラグマティズムから生まれた誤解を解くために真理に関する論文も書き、発表していた時期でもあった。

当時の社会状況を反映した面白い手紙である。この文面から溢れるのは異国の友人に対するジェ

イムズの親しい心使いである。だが、この手紙の最大の特徴は彼の社会改善論者としての側面(meliorism)をよく表現していることだ。若い時に南北戦争の悲惨さを身近に体験し、来たるべき世界大戦の勃発を敏感に感じていたジェイムズの立場は、完全な平和主義者のそれである。彼の戦争に対する平和主義者的な論考は、亡くなった1910年に出された『戦争の道徳的等価物』(“The Moral Equivalent of War”)が有名である。この論考は当時の戦争必然論を論駁した上で、軍人の高徳な精神をもっと別の公共的な労役・奉仕に徴用すべきだということを述べている。これは、

ジェイムズの哲学を実践的な社会平等というテーマに応用した名品である。(また、彼の考えは後のケネディー大統領の時に創設された平和部隊の設立において実現されている。)この頃、アメリカでは日本の軍事力がアメリカの国土を侵略・占拠するという議論があった(『戦争の道徳的等価物』参照)。姉崎に対して気をつかって、ジェイムズはこの手紙の様な発言をしたのであろう。いづれにしても、東も西も越えた、コスモポリタンの「関係性の概念」(Daniel W. Bjork)を終生、自己の哲学創造の核とした彼の一面がよく伝わって来る手紙である。(村山)

95 IRVING ST.  
CAMBRIDGE, MASS.

Feb. 4. 1908

Dear Mr. Anesaki,

I thank you for your letter and for the Coenobium,<sup>(1)</sup> which I do not regularly see.

I regretted not having been able to call on you and see more of you during your short stay in Boston. I was practically unable to get to the Bellevue Hotel in those days, and knew not how to address you afterwards.

I found your article on lay-fellowship very interesting. Especially suggestive was the Hotoku sect.<sup>(2)</sup> So simple a conception! and yet not used in Christian lands, except incidentally and inessentially, in ethics.

As for the war-talk between Japan & the U.S., I can only attribute it to a sort of insanity of stupidity on the part of the french and Germans. I doubt whether Russian cunning can have got it up. It sounds literally demented. You probably agree with me that the one thing wh<sup>(3)</sup> it is the duty of statesmen and citizens in Japan, China and the whole “Western” world to work for night and day, <sup>(ママ)</sup>is the prevention of the possibility of any more war, between East and West. All possible obstacles should be accumulated by the patient co<sup>(ママ)</sup>operation of those who have the power, continued for centuries if need be.

Newspapers ought surely to be restrained from ever printing the word “war” when delicate international situations come about.

Do you know those splendid and profound pages on war in Tarde’s<sup>(4)</sup> Opposition universelle?— beginning with page 385. The best account of the subject with which I am acquainted.

Very sincerely yours, Wm James

※なお原文中、文法や正書法・用語等の点で不整合が感じられた箇所がある。これについては(ママ)を付した。

- (1) イタリアの学術雑誌で1906年発刊。Anno II, (1907) pp.1-12に姉崎の論文“Coenobio Lacio Nell'esterno Oriente”(イタリア語論文)が掲載されている。なおこの業績は『姉崎正治の業績』(1974)には掲載されていない。
- (2) 姉崎の上記の論文は東洋における在家・在俗信徒団について論じており、その中で二宮尊徳の報徳社を紹介している。報徳とは天地人に対する人間の報恩のことを意味する。『三才報徳金毛録』が有名である。
- (3) おそらくwithの略と思われる。
- (4) Tarde とはフランスの社会学者Gabriel Tarde (1843-1904)。ここで言及されているのは *L'opposition universelle*, Paris, 1897。

[試訳]

95 アンヴィング通り  
ケンブリッジ、マサチューセッツ

1908年2月4日

親愛なる姉崎様

お手紙を、また普段は見る事のない『コエノビウム』誌をお送り下さり、有り難うございました。

貴方の短いボストンでの御滞在の際にお訪ねし、もっとお話しできなかったことを残念に思っております。あの時は実際、ベレヴュー・ホテルに御連絡しえぬ事情があり、またその後はどちらにお手紙をお出しするべきかも分かりませんでした

俗信徒集団に関する貴方の御論考、非常に興味深く拝見しました。報徳宗はことに示唆的でした。何という簡素・明快な概念でしょう！キリスト教圏では、倫理学において例外的、また非本質的な仕方を用いられる外は、なお使用されることのない概念です。

日本と合衆国との間の戦争の風説について言えば、私としてはこれをフランス人とドイツ人の側のある種の無分別な狂気に帰するより外はありません。ロシアの悪巧みがそうした風説を起こしたかどうか、私は疑うものです。文字通り、間違いじみた話です。貴方もおそらく同意されるものと思うのですが、このことに関して最も肝要なのは、日本や中国や「西洋」世界全体の政治家と市民には、東洋と西洋との間にこれ以上戦いが起こる可能性の芽を摘むために、日夜努力する義務があるということです。影響力を有する人々の間での、忍耐づよい協力によって、もし必要ならば幾世紀かけてでも、考えうるあらゆる障害が集積され〔除去される〕べきでしょう。

タルドの『普遍的対立』における、戦争についての見事な、洞察に満ちた記述は御存知ですか。385頁から始まるものです。私の知る限り、この主題に関する最良の叙述です。

敬具

ウィリアム・ジェイムズ

## 訂 正

本号12頁下から5行目に以下パラグラフの脱落があります

実際の所、国際情勢が微妙な局面を迎えているときには、新聞は「戦争」などといった文字を印刷することすら、差し控えるべきでしょう。

Jardai's Opposition impossible?  
385. The best  
account of the  
sub-fact with  
war in  
beginning  
of

95 IRVING ST.  
CAMBRIDGE, MASS.

Feb. 4. 1908

which I  
am again

Dear Mr. Anesaki,  
I thank you for  
your letter and for the  
Cocobium, which I do not  
regularly see.

I regretted not having  
been able to call on you  
and see more of you during  
your short stay in Boston.  
I was practically unable to  
get to the Bellevue Hotel  
in those days, and knew

pridity on the part of the  
French and Germans. I  
doubt whether Russian  
Cunning can have got it up.  
It sounds literally demented.  
You probably agree with  
me that the one thing which  
it is the duty of Statesmen  
and citizens in Japan,  
China and the whole "Wes-  
tern" world to work for night  
and day, is the prevention  
of the possibility of any  
more war, between East

Very sincerely yours,  
Wm James

not how to address you after-  
wards.

I found your article on  
lay-fellowship very interesting.  
Especially suggestive was the  
Ho-toku sect. So simple  
a conception! and yet not  
used in Christian lands, ex-  
cept incidentally and in-  
sentially, in ethics.

As for the war-talk be-  
tween Japan & the U.S., I  
can only attribute it to  
a sort of insanity of stu-

and West. <sup>All</sup> Every possible  
obstacles should be accu-  
mulated by <sup>the</sup> patient co-ope-  
ration of those who have  
the power, continued for  
centuries if need be.

Newspapers ought  
surely to be restrained  
from <sup>ever</sup> printing the word  
"war" when delicate in-  
ternational situations come  
about.

Do you know those  
splendid and profound pages